

開催報告

秋学期FD講演会

「100分授業をデザインする ―先行大学の事例を手がかりに―」

[2018年12月18日]

次年度からの授業時間変更に際し、大規模授業に焦点をあて、100分授業におけるデザインの道筋を探ることを目的として、池袋キャンパスでFD講演会を開催しました。講師として明星大学の福山佑樹氏（明星教育センター・特任准教授）をお迎えし、他大学での先行事例をもとに、長時間授業における試行錯誤などについてお話いただきました。参加した本学教職員25名がアクティブラーニングを体験することで授業デザインや実践の手がかりを得る機会となりました。

はじめに、長時間授業に対する先行大学での学生の反応から課題を整理され、授業手法としてアクティブラーニングを取り入れることをご提案いただきました。参加者とともに考える機会にするために、改めてアクティブラーニングの定義を確認したうえで「授業をスムーズに進めるための手法」、「短時間で出来るディスカッション」、「振り返りの手法」といった多様な分野で取り入れられている手法例をご紹介いただきました。続いて、アクティブラーニングを用いた授業例について

は、ある先生の失敗談を交えながら試行錯誤のプロセスを丁寧に解説いただき、動画資料を参照することでより実践に近いイメージを共有することができました。最後に、長時間授業をする際のポイントについて述べられました。

質疑応答では、大規模授業におけるアクティブラーニング手法の取り入れ方やグループディスカッション実施時のコツなどが話題となりました。また、参加者自身が担当する授業のデザインや教授・学習方法に関する質問が多く寄せられました。各参加者が抱える課題に対して、それぞれ思考を巡らせ、FD講演会は盛会のうちに終了いたしました。



福山 佑樹 氏

参加者アンケートでは「今日のFDを参考に、組み立て直してみたい」といった授業の再構築に前向きな回答がみられ、自身の授業にジグソー法やBRD方式などを取り入れてみたいという具体的な内容が多く寄せられました。また、長時間授業をする際のポイントとして挙げられた、扱う内容を増やすのではなく、従来の内容をより深める工夫が大切であることが印象に残ったというご感想を多数いただきました。

ご登壇、ご参加いただいた皆様に改めて御礼申し上げます。

助教 藤澤 広美



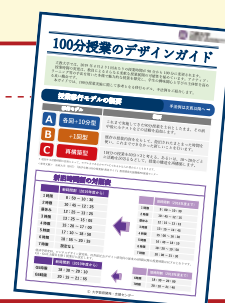
ペアワークの様子

お知らせ

100分授業の参考となるコンテンツを公開しています〈本学教職員向け〉

- 上記FD講演会の動画（講演部分）をご覧ください。
- 2018年秋に当センターでは「100分授業のデザインガイド」を刊行しました。100分授業への変更に際して参考となる移行モデル、手法例をご紹介します。

ページはこちら → <https://spirit.rikkyo.ac.jp/cdshe/SitePages/index.aspx> (SPIRIT ▶ 当センターHP ▶ 「取り組み・刊行物」)



Rikkyo Education

Rikkyo Educationは、立教大学で行われている授業実践や教育上の取り組みなどを紹介するコーナーです。今号は、全学共通科目のGLP(グローバル・リーダーシップ・プログラム)を取り上げます。GLPの入門科目である「GL101」は2013年度に池袋3クラス・新座1クラスで始まり、現在は池袋9クラス・新座3クラスへ発展しています。2018年度に授業を担当した経営学部の稲垣憲治特任准教授と、授業履修とSAを経験した文学部教育学科3年の青木千愛里さんと文学部キリスト教学科2年の廣岡駿一さんに、グループワークの学びについて座談会形式でお話いただきました。

「GL101」におけるグループの学びの経験

経営学部特任准教授 稲垣 憲治
文学部教育学科3年 青木 千愛里
文学部キリスト教学科2年 廣岡 駿一

—GLPとは？

チームの目標達成に向けて貢献できる人を育てるプログラムで、入門であるGL101から発展編のGL302まで開講しており、段階的にリーダーシップを学ぶことができる。

グローバル:多様性に対応すること。
リーダーシップ:権限や役職にとらわれず、メンバー全員が力を発揮し成長しながらチームの目標達成に向かって行動すること。

—「GL101」の授業内容は？

- 企業の現実の課題解決に取り組む入門科目。提携するクライアント企業から提示される課題をチームで分析し、解決案を考える。
- 授業内容は基本的に全クラス共通(2018年度は池袋と新座で計12クラス)。
- 各クラスにSA(Student Assistant)が1名つく。
- 予選を勝ち抜いた6チームが本選でクライアント企業へ解決案を披露して競うプロジェクト型授業(2018年度は全49チーム)。

—SAの働きは？

書類選考を経て、3月に合宿などによる事前のファシリテーション研修に参加。授業期間中は毎週、以下のミーティングに参加しつつ、主体的に授業設計や運営に携わる。

クラス単位

授業前に教員とSAで話し合う。

全クラス

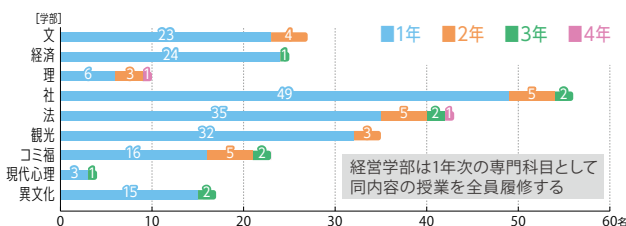
授業後に全クラスの教員とSAで話し合う。

SA

水・金曜日の昼休みに実施。
※2018年度

—2018春学期の履修者は？

- 学部、学年別の内訳(全履修者数:240名)



- キャンパス移動を伴うクラスへの履修者数

池袋→新座:6名、新座→池袋:5名

多学部・多学年が集うGL101のグループワーク

稲垣:今日は「グループの学び」とお題をもらっていますが、まずグループワークの準備で気をつけているのは、何のためにやるのかということです。どういうやり方が一番効果的に伝えたいものが伝わるのかを考えて作ります。実施の際は、伝えたいものは本質として持ちながら、その場がどうなっているかをよく見て、時間を長くしたり短くしたりします。

あとはみんながふっと軽くなるような一言を添えたりします。その場で学生が何かやっている事を拾って言うとか、心の声を言うとかですね。読心術というか、おそらく彼らが頭の中で「ええ、そんな事やるの」みたいに考えているのを、「ええ、そんな事やるのって思っている人もいるかもしれませんが」と言うなど、できるだけやりやすくさせます。

これらはGLにかぎらず、グループ学習では共通することですが、「GLだからこそ」の点では、やはり多学年で多学部なので、その辺をできるだけ混ぜるグルーピングですよね。あと、意見などを出すときに、あまり決まった人ばかりではなく、様々な人が意見を出せる雰囲気を作ることを心がけます。



稲垣憲治特任准教授

GLの中で、チームのメンバーとは仲良くなったものの、クラス全体がイマイチ…ということも以前からある課題なので、できるだけクラス全体でやれる事を目指しています。プロジェクトはどうしても結果を出さなければいけないので、そのチームは固定ですが、他の、例えばアイスブレイクなどは、クラス全体やばらばらのグループでやったりします。グルーピングは結構SAに任せます。

経営学部のBLP(ビジネス・リーダーシップ・プログラム)でも1年生を対象に同じ形の授業をしていますが、GLでの手応えとしては、やはり多様な人たちがいるので、より主体的にやれている感じがしますね。

廣岡: 主体的にというのは間違いありません。受講生にとって、この科目が必修科目か否かはとても大きいと思います。僕は1年生のときにGL101を受講したのですが、GLPは選考があり、授業を取る前にレポートを書きました。倍率が2倍ぐらいあった中で履修できたので、特に思い出がありました。そういった意味で、必修科目とはやはり違います。そのため、グループワークなどにも熱が入っていました。例えば、必修科目だったら、LINEで連絡するだけで済ませることもありますが、GLのチームによっては深夜中電話するところもあるぐらい、熱心な人は多いと感じます。

他に必修科目のグループワークと違う点は、チームメンバーの学部が違うからこそ生産性を上げようと工夫することでした。例えば、タイムキーパー(時間管理担当)を設けることは、この授業を受けるまで意識したことはありませんでした。学部が同じなら空きコマがだいたい一緒なのでのんびり作業ができますが、全員の学部が異なるとそうはいきません。少ない時間でいかによりよいものを作れるかを考えさせられるよい機会になったと思います。

稲垣: なるほどね。

青木: 私が様々な学部の学生がいて良かったなと思った経験の1つが、冷蔵庫を使う案で、冷蔵庫のワット数をコスト計算で出そうと考えたときです。多くのメンバーがその計算を分からなかった中、理学部のメンバーが計算してくれました。経営に関する話だと計算が本当に多いので、経済学部と理学部のメンバーがいて、私は文学部なので良かったと思います。

あと、学年が多様であることも自分にとってはとても刺激になりました。私は2年生のときにGL101を受講しましたが、私のグループは1~3年生がチームにいて、3年生は就活しながら授業を取ったり、1年生は入学したばかりでキラキラしていて、自分はその真ん中にいて、過去の自分と将来の自分のように感じられました。そして、グループによりますが、みんな本気で取り組むチームが多いので、授業が全部終わった後も関係が続いています。実際に自分が就活を始めたときに上級生に相談したらES(エントリーシート)を添削してくれたりしました。GLは自分にとって、学年を超えたつながりができる場になったと思います。

稲垣: 特色だね。授業の半期が終わった後に、まだ話したり、ご飯を食べに行ったりするんだものね。

青木: 全学共通科目でGLほどコミットする授業はなかなかないと言いますか、そういう授業を他に私はまだ聞いたことはありません。

稲垣: だからリベラルアーツと言うのであれば、様々な学部の人が混ざっていることは、結構、意味があるかもしれないね。



青木千愛里さん

毎授業後のSAと教員のミーティング

クラス単位の一対一のミーティング

稲垣: 廣岡君と青木さんは自分がGL101を受講した翌年にSAになってくれたわけだね。今度は教員とSAによる授業の進め方の話をしましょう。基本的に授業の流れは全クラス共通で、マスターライドはCA(コース・アシスタント)が作ります。ライドはSAが基本的に説明しますが、クラス用にカスタマイズしたものをを見せてもらい、「この部分は先生、やってください」とか、「この部分は掛け合いで」などの相談を経てやっていたね。内容についてもSAがクラスの状況をみながら考えや意見を言ってくれて、準備しましたね。

廣岡君が私の授業のSAについてくれたわけですが、廣岡君は割とロジカルに考えるのが好きな人なので、「これは何が問題なの?」など合理的な解決策を出すところがあったのが、結構フィットしている感じでした。

廣岡: たしかに、稲垣先生と授業内容に関して、ある話題を入れるか否かについて話していたときも、お互いに合理性を求めたからすぐに消化できた気がします。

ミーティングでは、先ほど稲垣先生が仰っていたように、チーム内だけでなく、クラスとして仲良くなるためにはどうしたらよいかという点は、結構話した気がします。僕もそれにこだわっていました。例えば、最初の授業では、ライドに「誕生日順に座ってください」とだけ書きました。わざと受講生同士が直接話し掛け合えない環境を作ったわけです。

稲垣: あと、ひとりひとりの名札がありますが、その名札を配らせましたね。名前を覚えないと配れませんから。

廣岡: 授業前の準備を手伝ってもらう一環として、1人の受講生に「名前当てゲームやろう」と言って、何人分かの名札を渡し、その子が「あれ、この子誰だっけ」となりー。

他に工夫した点は、授業ごとにグループワークのメンバーを変えることでした。プロジェクト課題に取り組むメンバーでずっと同じグルー

プにすることも合理的だと思いますが、私はクラス全体で仲良くなる目標から考えて、なるべく毎回グループワークのメンバーを変えていました。

稲垣:知識のインプットのためのワークは、プロジェクト課題のチームでやらなくてもいいので、それはあえてばらばらでやって、その後で考えるとところはチームになってやる、このようなやり方でした。

廣岡:たしかに、1回の授業中でも席替えをして多くの人と関わるようにしたこともありましたね。あと、1分間スピーチもやりましたね。



廣岡駿一さん

稲垣:やったよね。前に出てきて1人ずつ喋るといふ1分間スピーチを、毎回の授業で目安2人ずつやりました。要するに、そうやって自己開示させていくというか、接点を増やしていきましたね。

廣岡:そこで話した内容は、「あの話をした人だね」とつながるので、クラスで仲良くなる大きな要因になったと思います。

全クラス合同のSA教員ミーティング

青木:私は、クラスが仲良くなったらいいなと同じように思いましたが、私自身も受講生同士もなかなか自己開示できず、最初は問いかけても発言が返ってこないこともありました。先生との1対1のミーティングのときでも、「なかなか受講生がオープンにならないよね」と話題に上って、積極的にクラス会を開こうとかか、どうしたらクラスみんなが打ち解けられるかを話していました。

それを授業後の合同のSA教員ミーティングやSAミーティングのときに相談させていただいたら、様々なクラスから「このアイスブレイク良かったよ」などと案を頂きました。それを試してみたら、最後はクラスみんなが最初よりは笑いが起きるようになって、様々な先生とSAの方、本当にありがとうございます、という心境です。たぶん誰よりも助けられたクラスだと思います。

稲垣:確かにSA教員ミーティングで先生からクラス運営の相談としてメンバーにアイデアを尋ね、別のクラスのSAが自身のクラスでの工夫を具体的に答えるシーンがありましたね。だから授業後のミーティングは、教員とSAが1つのチームとしてやっていた感じがしますね。

GLの面白いところです。同じ内容を12クラスでやっているため、12人のSAと1人のCAがいますが、その13人がそれぞれの経験とか知恵を持ち寄って作っていることが、すごく面白いです。何ていうか、3~4カ月間が終わってみると、最初に想定していたものよりも、面白いものができあがってくるという感じはしますね。また、どんな人たちがSAになるかによって、毎回変わりますし。2019年度は2018年度とカラーが全然違うので、また違う感じになるなど。

青木:楽しみです。

SAミーティング

稲垣:SAだけでも集まっていたみたいだけど、SAミーティングではどんな事をやっていたの?やはり本選とか中間発表とかその辺りの時期にたくさん話をしていたよね。

青木:中間発表は、今年初めて、池袋と新座の同時開催をしたので、採点方法などがとても複雑でした。どれが一番、受講生と先生の間になにとって良い採点になるのか、平等性が保たれるのかという話を、担当の人が話していました。

私は本選担当でしたから、去年の資料を事務局から頂いて、それを元にやりました。でも、人数も少し多くなったり、仕組みが違うところもあって、それをみんなで、どのようにしたらいいのか話したりしました。あと、2回リハーサルを行いました。1回目のリハーサルをしたら「意外とここができていなかったね」となり、後半はSAみんなですういう運営面の話を多くしました。

稲垣:舞台の動線とかね。ここはこういう風に行ったらとか。

青木:受講生が舞台上がって帰るまでの動線と、SAとCAの13人の最適な配置や役割を話していました。

廣岡:個人的にはあの運営面の話が結構、学びになりました。リハーサルは1回でいいと思っていました、最初。2回も面倒くさいなあと。

青木:リハーサル!たしかに。夜遅くまでですから。でも私はリハーサルが一番楽しかったです。どうしたら受講生にとって学びになる、そしていい思い出になる本選になるのかみんなで考えることはとてもやりがいがありました。また、みんなでコンビニに行って、お夕飯買って、食べながら臨んだことも楽しく感じられました。

廣岡:たしかにみんなですごした時間として楽しかったね。マジメな話をすると、僕はいつも課題を前日の夜にやるような人なので、本番を無事故で終えるためにリハーサルを重ねることの重要性を感じた経験でもありました。



青木: 受講生のときには気付きませんでした、SAの人がこれだけ本選を作るのに動いていたのだと。本選や予選を作るのも準備などがあるのだと、実際にSAになって気付けたことかもしれません。

廣岡: 受講生は受講生で本選のための準備が大変ですが、SAはSAで大変ということですね。私もSAになって初めて、自分のSAが1回の授業でこれだけ準備していたのだと感じさせられました。例えば、受講生は毎週レポートを1本送ればいいのに対して、SAになれば20本ぐらいの課題を見た上で、次の授業のパワポを作らないといけません。少しでも分からないところがあったら教員やSAに確認しないといけません。理解することと教えることはまた違いますから。自分で理解する以上に理解しないといけないので。

SA経験の学生自身の学びについての意味

稲垣: そうだね。その経験はどうか、今後の自身の学びにとって、どのような意味を持っているのでしょうか。

廣岡: 僕がSAをやりたいと思った一番の理由は、将来教師になりたいということが原点にあります。そのための経験として、塾講師ならば授業自体はできますが、SAはそれ以上にクラス運営も経験できます。クラス運営をどうするかを考えている時間そのものが貴重だったと思います。結果的に成功したかどうかは分かりませんが、自分で考えて工夫すること自体がまさに今後の糧になると思います。

青木: 稲垣先生が仰っていた、「見える山は人それぞれ違う」という点が、私がSAで一番学んだ事です。私は自分の受講生時代のクラスに思い入れがあり、そういうクラスを作りたいと思っていました。でも、やっていくなかでクラスの在り方は様々で、自分がいいと思ったことでも状況や人によっては必ずしもいい訳ではない、今の受講生には何が見えていて、私はそこで何をすべきなのをもっと考えることが大切である、と気付かされました。例えば、就活についても友達と話してみると「そういう風にその会社を見ることもできるのか」と気付くことがあります。今までの固定観念がとても強かったこと、それぞれの見えている世界、見え方があることを知りました。

もう一つ、「その人にとってベストな行動をしている」ことも、なるほどと思ったことです。例えば、受講生が課題の提出をしないことが続いたとき、私は「どうしてなのだろう」と考えていましたが、他の授業やサークルが忙しくて課題をする時間がないなど、その人にはその人なりの事情があって、今その人ができるベストの行動をとっているのだと気付かされました。このことは、忘れないようにしたいと思います。

この2つは自分にとって大きな学びで、これから社会で色々な人と接していくと思いますが、意識していきたいと思いました。

廣岡: 最後にもう一つ、稲垣先生と最初にお会いしたときに、「preparation(準備)じゃなくてreadiness(用意)」と仰っていたのを

体現できたのも僕の成長の1つだと思います。「preparation」は細かな準備ですけれども、「readiness」は、細かく予定は立てずとも、いつでも応答できるような用意です。

どちらもバランスを取れたら一番良いと思いますが、今まで「preparation」の考えしかなかった私に「readiness」ができたことで、授業が今こういう流れだから、少し予定と変えてこういうチャレンジをしてみよう、などの授業をできるようにになりました。

例えば、授業中みんながグループワークをしている間に「稲垣先生、今から少し劇みたいなことを僕ら2人でやりたいのですが」と掛け合ってみたりしたこともありました。

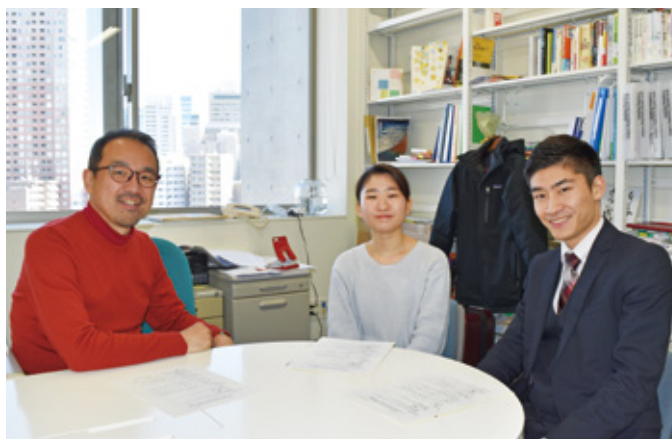
青木: 掛け合ったのですか? すごいです。

稲垣: 何でも提案できます。

劇はインサイトを教えるときだったね。人の心の中にある、自分で気付いていないかもしれない、「そうそう、それが欲しかった」というもので難しいです。

たしか劇のシチュエーションは母親同士の会話で、1人のお母さんが「うちの子が言うことを聞かないから困っているのよ」などと言って、それに対して、そのお母さんに実は何が本当の問題なのかに気付いてもらうという話です。お母さんが大変と言っているのは、子どものためを思っているのではなく、本当は自分が「あそこの家の子どもは」と言われる、要するに自分にとって嫌だと感じていることに気付かせるといった、そういうリクエストで劇を演じましたね、その場で。

廣岡: 即興の劇はあの授業の中で一番印象的になっていますし、今でも覚えています。それは「readiness」によって生まれたものですから、私にとって非常に価値ある学びになりました。



— GLPについて詳しくはこちら

授業概要・プロジェクト課題などは「プログラム案内」からご覧いただけます。

<https://ghrd.rikkyo.ac.jp/program/GLP.aspx>

(上記ページ▶「SNS・パンフレット・刊行物」▶「パンフレット」)



紫縁談義

卒論必修を守る

現代心理学部心理学科は、文学部心理学科から引き継いだ卒業論文必修を守っている。例外的に、留学した人のための卒業研究制度もあるが、基本的には全員が卒業論文を書かないと卒業できない。他学科が次々に卒論を選択制にしていく中で、就職活動に専念する選択も必要ではないかという議論も何度か起きた。しかし、心理学科が伝統的に大切にしてきた、科学的に事象をとらえる姿勢や論理性を学んだ人を社会に送り出したいという願いにこだわる教員が多く、私もその一人である。

私は臨床心理学を専門としているため、ゼミに入ってくる学生には、心が痛んだり重くなったりした人に対してどういう働きかけをすれば心の痛みが弱くなったり、心が軽くなったりするか、という曖昧かつ主観的な事象に関心を寄せている人が多い。中には実験という極めて科学的な方法で研究を進める人もいるが、多くは、人に問いかけてその人が心の中で感じていること、自分の行動傾向について自分で意識していることなどについて答えてもらうという、質問紙や面接などの内省的な「自己報告」をデータとして研究している。

主観的な自己報告データだからこそ、それを処理し、分析する段階での、客観性や他者の批判を受ける作業が研究としての信頼性や妥当性を高めるために不可欠である。卒論とレポートの違いは、ゼミの中で、また、指導教員とのやりとりの中で、研究の方法やデータ処理などについて繰り返し検討し、壊しては作り直す苦しい作業を経て一つのまとまった主張を論理的に論文として文章化することであると考えている。

データの集め方や、処理・分析の仕方の訓練も、現実に取り組む科学的な姿勢の訓練として貴重な経験だが、教員としてもっとも学生たちにとって大切で、かつ、欠けていることが多いと感じるのが、言いたいことを論理的に文章化する論文執筆の力である。特に、長い大きな文章を組み立てること、最初に立てた問いに対応して大きな目で全体を見ながら、自分の思いこみを離れて、謙虚にデータの語ることに耳を傾けること、また、他者の立場や視点から自分の言葉を見直すという姿勢を持つことは、なかなか難しいようである。混迷を深める社会に出ていく学生たちには、「自分」をいったん離れて自分の考えや言葉を見直す姿勢や、立場の違う人にも通じる論理的に語る技を自家菜籠中のものとしてほしいという願いを胸に、学生たちとの対話を続けている。

現代心理学部教授
林 もも子 (はやしももこ)

